
三人の空

景雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三人の空

【Nコード】

N3919V

【作者名】

景雪

【あらすじ】

松本三郎、小山達男、杉田千代子は幼馴染で、松本と小山は大空に憧れ、パイロットになってどちらが早く千代子を空に連れていくか競い合っていた。数年後、太平洋戦争が泥沼化していく中、「帝都上空に少数機で侵入するB-29を必ず撃墜しろ」という命令を戦闘機パイロットとなった松本は受けて

「たつつん！ 飛行機だ！」

「おう、さんちゃん。複葉機だな。気持ち良さそうに飛んでつぺよ」

「わたしも空飛びたい！」

「ちーこ、俺、パイロットになっから乗せてやつぺよ」

「いや、俺が乗せてやつぺ、ちーこ！」

「あはは。じゃあ二人とも乗せてよ。約束だよ」

* * *

雲を形作る水滴の塊が暴力的な冷たさでもって吹き込んだ。

松本は思い出したように我に返り少しの間意識を失っていたことに気付く。風防の割れた部分から吹き込む冷気は操縦席の形で松本の身体を包み込む。ちようど雲の中に入っているので数十センチ先に何があるかも判然としない。上を見ても下を見ても左右を振り返っても、白い透き通る雲が自分の周りにあるだけで、景色の変化と言えば雲の所々が薄い灰色に色づいている程度に過ぎなかった。

気を失っている間に夢を見ていたのだろうか。夢の中で松本は十数年昔に遡り、たつつん 小山達男と、ちーこ 杉田千代子と三人で飛行機を追いかけていた。松本は下の名前が三郎だから、二人からさんちゃんと呼ばれていた。最前線の帝都上空を飛行中に昔の甘ったるい思い出を夢に見るようでは、もしかして俺は今日墜とされるかもしれない、そういう弱気な考えが頭をよぎり、松本はそれをすぐに打ち消して操縦桿を握る手に全身の神経をかき集めた。

「単機、もしくは少数機で侵入するクジラを、絶対に帝都に入れるな！」

飛行隊長谷口少佐から松本軍曹は直接命令を受け、今まで一度も言葉を交わしたことの無い佐官である飛行隊長に、松本は恐縮して四本並んだ階級章の金筋さえ恐れ多く見えて伏し目がちに視線を落とした。松本はクジラを五機撃墜した成りたてのエースであり、飛行隊長自らが二十二歳の一介の軍曹に直接命令を伝えたのは、松本の腕を信頼する表われそのものだった。飛行隊長は葉巻に火を付け、一口吸い込んで大きく煙を吐いた。

「松本。貴様も知っていると思うが、広島と長崎に新型爆弾が投下された。投下したクジラは単機で侵入したと言う。帝都に新型爆弾を投下させてはならん。体当たりしてでも叩き落とせ！」

「はっ！」

新型爆弾を積んだクジラ 米国陸軍B 二九爆撃機 を迎撃するため、それまで松本が乗っていた三式戦ではなく、特別に五式戦があてがわれた。五式戦は三式戦の液冷エンジンを空冷エンジンに付け替えた最新鋭の戦闘機で、最高速度は三式戦に劣るがエンジンの信頼性が高く、軽量で小回りがきいた。

* * *

高度計は離陸直前に銃撃された際に壊れたのか、千メートル以下を指したままで役に立たなかった。松本は四年の飛行歴で培った己の経験だけを頼りに操縦桿に加える力を微妙に変化させ、そう離れてはいないはずのクジラを求めていた。ずっと雲ばかりだった周りの景色に一瞬だけ覗いた青い空を、松本は決して見過ごさなかった。雲の切れ間に慎重に近づき、松本は雲の先に何が見えるのか、機体を斜めに傾けながら二・五の視力のありったけを使って黒目をせわしなく動かした。自分よりも百メートルほど低空を飛ぶ双発機を認めて、松本は一人きりの操縦席で小さくつぶやいた。

「^{かぶら}矢だ。尾翼の識別は十三……小野少尉殿か」

矢とは正式には震天制空隊と言い、二式複戦“屠龍”でクジラ

に体当たりする空の特別攻撃隊の呼称だ。配属されるのは特別操縦見習士官が主で、小野少尉も慶應義塾大学を繰り上げ卒業した若い少尉だった。

* * *

「松本。貴様本は読むか」

「いえ。余り読みません」

小野が配属されたばかりのある夜、松本は士官室に呼ばれ、酒の相手をさせられた。小野は普段は無口だったが、酒が入ると急激に口数が多くなる男だった。

「私はトルストイが好きだ。ドストエフスキーも良い」

「は……」

小野は大学でロシア文学を学んでいたという。しかし外国語など少しも理解できない松本には、小野の話すドストエフスキーなる小説の主人公が抱える苦悩など、はるか遠い世界で演じられている他人ごとに過ぎなかった。松本が酒をつくと小野はいつも懐に忍ばせているロシア文学の本を、松本に見せた。敵性国の書物ではあるが、死ぬことが決まっている鏑矢に限ってはあまりうるさく言われなかった。小野はページを繰りながら、この部分がお気に入りだの、ここは何度も読んだだの講釈した。イトミミズがのたうっているとは思えない横文字の羅列は、見ていると酔いが早く訪れる気がした。

* * *

小野機は右のエンジンから煙を吐いていた。イワシ　クジラの護衛戦闘機であるP　五ムスタング　に深手を負わされたことは明らかだった。小野は斜め上に松本機を認めると、翼を振って合図した。きれいに覗いた白い歯は、彼の顔の半分が血に染まっていることを忘れさせた。小野は日本軍迎撃戦闘機を追いかけまわして

いるイワシの一機に狙いを定め、後方の死角から忍び寄り見事に体当たりした。二機は同時に破裂し金属の破片を周囲に散らせた。バラバラになった書物の一部を見つけ松本は、拳手の礼で小野少尉と彼が情熱を注いだ欠片を見送った。イワシに追われていた友軍機は墜落したのか、硝煙がほとんどなくなった空に敵機も友軍機も見えなかった。松本は右下方に見える房総半島の位置から現在地を割り出し、クジラが向かったであろう方角に機首を向けた。

* * *

「松本軍曹殿」

兵舎を出た松本に、小山伍長が拳手の礼の姿勢で声をかけた。小山の顔を見て、松本は引き締めていた顔の力を抜いた。

「たつつん、上官はもういないぜ」

「そうか、さんちゃん」

松本三郎と小山達男は栃木の宇都宮で生まれた幼馴染だった。地元でガキ大将としてならした松本と、冷静沈着で時には松本の行き過ぎを抑え、一番の理解者である小山は、付き合って二十年近くなる仲だった。

「空、飛びてえな」

それが二人の口癖だった。二人が十四歳だった昭和十二年、神風号が東京 ロンドン間国際新記録を達成して日本中が沸き立っていた時、松本も小山も飛行機のパイロットになることを決めた。

「やつぱり、戦闘機だよな」

「あつたりまえだ。戦闘機だつぺー！」

そう誓い合って四年後、二人は陸軍の航空畑に進んだ。松本は技量甲で戦闘機搭乗員に抜擢されたが、視力が一・二しかない小山は搭乗員にはなれず、やむなく整備兵になった。

「いつか、俺も空に連れて行ってくれよ」

それが小山の口癖だった。軍隊では配属先がどこになるか分から

ない。二人は別々の勤務地で、それぞれの任務を全うした。松本は一式戦や三式戦に乗り、九州の知覧で敵機の迎撃にあたった。昭和十九年にもなるとサイパンなどから飛んでくるクジラは日本本土を爆撃するようになっていた。小山は整備兵として、所沢や調布などの飛行場に勤務した。たまに、二人の休暇が重なったりすると、故郷の宇都宮に帰り、つかの間の休息を楽しんだ。

「ちーこー！」

名前を呼ばれてえくぼをへこませ、杉田千代子は大きく笑った。千代子は、松本と小山が生まれた時から知っている幼馴染だった。

「さんちゃん、空は、どう？」

「気持ちいいっぺよ。雲の上に行くと、雨も降らないしどこまでもずっときれいな空が広がってっぺ。」

「今度、連れて行ってね！」

「俺の方が先だっぺよ！」

「おいおい、喧嘩すんなよ。」

三人は浴衣姿で松本の実家の縁側に座り、スイカの種を飛ばしながら、同じように笑った。夏至の前後、日が長く暗くなりかけの空に、ヒグラシが高く短い声を断続的に響かせていた。松本と小山の二人は同じような視線を、一応本人には気付かれないように千代子に向けた。千代子は二人の眼差しに気付いているのかいないのか、ずっと同じようにえくぼを強調したままスイカの冷たさを味わっていた。

松本が調布飛行場に異動となり、同じく調布飛行場勤務だった小山と同じ勤務地になったのは昭和二十年七月の終わりだった。調布飛行場に本拠地を置く飛行第二四四戦隊は、帝都防空戦闘隊であり、東京を爆撃に来るクジラを迎撃する、陸軍最精鋭の部隊だった。松本の乗機はドイツのマウザー砲装備で、巨大なクジラといえども、マウザー砲の二〇ミリをまともにくらったら瞬時に火を吐いた。訓練が終わった後などに、松本はエンジンをかけていない操縦席に座

り、クジラのどてっ腹にマウザー砲をぶち込む瞬間を、様々に思い描いた。広い飛行場の滑走路は爆撃から身を隠す偽装網ばかりで閑散としていた。たまに空襲を知らせるサイレンが低く唸るように鳴り、搭乗員たちは常に飛行服で仮眠をとっているので即座に発進体制に移ったが、敵機来襲は誤報も多く、無駄に神経ばかりすり減らす日々を過ごした。搭乗員の疲労は蓄積する一方だったが、空での雌雄を決する視力を保つために必要な卵、肉類は中々手に入らなくなっていた。

今日、八月十四日朝十時に警戒警報が鳴り、松本が五式戦の操縦席に飛び乗った時には既にイワシが二機飛行場に襲いかかろうとしていた。離陸直後を狙って撃墜しようとする奴らの常套手段だった。「ちきしょう！俺が整備した五式戦を撃たせるかよ！」

小山が離陸しようとする五式戦に追いつき、まるで意味がないのに腕を広げて敵弾から守ろうとする。小山がかぶっていた帽子が風に舞い、高く飛んだ。

松本はスロットルを全開にしながら滑走路を走り、もう少しで離陸できるという辺りで上空からの衝撃を感じた。イワシが撃つてきた銃弾が彼を襲ったのだ。風防が割れ右腕に鈍痛が走る。しかし構わずに浮き上がり、そのまま松本は空中に突入した。滑走路に一瞥をくれると、小山が血だまりの中にうつ伏せに倒れているのが視野の端に入った。地上からの対空砲火でイワシの一機が木っ端みじんに粉碎され、松本を追っていたもう一機も慌てて高度を上げた。イワシを振り切ろうと高度を上げ上空を視認した際、クジラの銀色のどてっ腹が鋭く光った。

* * *

七月十二日夜、宇都宮を百機のクジラが襲った。梅雨の真ただ中で小雨が降りしきり視界が悪く、空襲警報が鳴った時には空をク

ジラの巨体が覆い尽くしていた。父が日中戦争で戦死し、二人の兄も出征している千代子は足の悪い母親の手を取っていたが、人ごみにもみくちゃにされて母親とはぐれてしまい単身で逃げた。宇都宮城址から二荒山神社までの参道をまっすぐ北に走っている際、対空砲火が沈黙しているのをいいことに一機のイワシが超低空に高度を下げてきた。速度を落とし、逃げる千代子をあざ笑うように飛ぶ。千代子は振り返りイワシを見ると、ちょうどパイロットと目が合い、堀の深い獣のような男が口元を醜く歪めるのが分かった。刹那、イワシの発射した十二・七ミリ弾が千代子の身体を貫き、千代子は二荒山神社の階段に肉の塊を飛び散らせた。松本が、小山が己の腕で優しく抱くことを夢見ていた千代子の白い肌は、夏の宵に瞬きをする暇も与えずに消え去った。

* * *

護衛のイワシは日本軍戦闘機の迎撃に散ってクジラは一機で飛んでいた。速度計の針を振り切るほどスロットルを全開にし、松本は飛散したエンジンオイルで視界の悪くなった飛行眼鏡に、クジラの大ぶりの尻を捉えた。最高速度は同じくらいだったが、全速で飛んでいる松本機の方が若干速かった。クジラはもうすぐ千葉県を抜けて帝都に入ろうとしている。帝都への侵入は何としてでも止めなければならぬ。噂としてしか知らないが、広島と長崎の中心部が新型爆弾一発で壊滅したという。それが日本中の各都市に落とされれば、日本本土の日本人は老人から子どもまで全滅し、日本人は満州や支那の一部でひっそりと血脈をつなぐことになる。しかし今帝都に新型爆弾を落とさせる訳にはいかない。大元帥閣下が松代大本営に移るまでは持ちこたえなければならぬ。

クジラはおよそ千メートルに近付いた。後方の旋回機銃が黙っている。向こうはまだ気付いていないのだろう。松本は操縦桿を握る右腕に緊張を込め、背筋に力を入れてまっすぐに伸ばした。風が

猛烈に入りこんでくるので嫌でも身体が震えたが、感覚が麻痺し始めていたので寒さには何とか耐えることができた。イワシがいないか後方を見て、松本は富士の雄大にそびえる姿を捉えた。富士を名残惜しそうに網膜に写し取り、松本はマウザー砲の発射柄を押さえた。

八月の晴天は信じられない程静かで、高高度では蝉の声も何も聞こえてこなかった。吹き込む風の音もいつの間にか消え去り、瞳と両腕だけで松本は確かに生きていた。大きな綿菓子のような雲の間を縫うようにクジラは飛んでおり、背景の上部は薄く、下部は濃く、それは下部に広がる東京湾の濃さだと分かった。

クジラ後方の旋回機銃が光り、気付かれたことを知った。銃弾の何発かが当たり、残っていた風防が粉々に碎け散るのを感じたが、松本はスロツトルを緩めなかった。雲を完全に抜けたクジラに陽光が注いで逆光で黒く光り、視界を不安定にさせた。しかしお互いの距離はもう五百メートルを切っており、鈍重なクジラが簡単には逃げることができない所まで松本は追いこむことに成功していた。

「たっつん」

松本は操縦桿に結わえてある白い布に触れた。達筆な小山が“必勝”と朱書きでしたためてくれた鉢巻きだった。

「ちーこ」

次に首から下げたお守りを握った。千代子が松本と小山の二人に二荒山神社で買ってくれた物だった。汗と垢でまみれて黒く変色したお守りの感触が、手袋を通じて伝わってきた。

「一緒に飛んでるぜ。三人の空だぜ。たっつん、ちーこ」

松本はマウザー砲の発射装置を押し下げ、どこまでも薄く青い空に突入していった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3919v/>

三人の空

2011年8月6日09時06分発行